

纏足の歴史 I

黄 紅萍*

中里喜子**

The History of Foot Binding (part 1)

Kouhei KOU and Yoshiko NAKAZATO

I はじめに

[目的]

五代南唐（西暦937～975年）以来、歴代の朝廷を経て、皇帝が変わっても、纏足の風習が変わらなかった、これは何故か？とすることを追跡して解明しようとした。

纏足は、世界文化人類史上に希な悲劇であったので、社会的背景から見た、この研究の必要性を感じ、目的とした。

[調査方法]

1) 資料収集・文献調査

纏足は、近代中国人あるいは、外国人がよく知られる風俗の一つである。しかし、悠久なる中国の歴史の中、纏足は国史級のレベルに達してないため、史料は極めて少ない、私は平成7年5月～6月の間、何回も上海の図書館に行き、そこで『婦女風俗考』の著者徐錦鈞氏にお逢いして何回も検討し、又、徐氏の紹介で上海の最も古い資料館徐匯蔵書樓へ行き、多くの本から、必要となる、資料を収集できた。

2) 纏足している人を訪問

親友の協力で、二人の方について写真撮影の他に、纏足したの年、年齢、その理由と苦痛などを聞く事ができた。(写真1参照)



写真1 纏足したのは4歳頃、解いたのは文化大革命時期、現在69歳。

足の長さ15cm 足の幅6.2cm 甲の高さ9.4cm

* 生活科学研究所 研修生

** 服飾美術科 被服衛生学研究室／生活資料館

Ⅱ 纏足の歴史

1. 纏足の起源説（表1参照）

纏足はいつ始まったか、数多くの研究者は一生懸命考証してきたことであろう。しかし、人々に心服するような結論は出ていない。史料も少ない。何故なら、纏足は国史級のレベルに達してない、一種の風俗史であるからである。

纏足の起源を究明するには、有力な考証が得られない限り、商説、春秋説、戦国説、秦説、晋説、六朝説、隋朝煬帝説、唐説、五代南唐説など、色々な起源説が考えられるが、ここで、歴史上、多く伝わった起源説を述べたいと思う。

表1 纏足の歴史の年表

第一段階； 準備期	孔子時代（公元前551～ 公元前479年）	当時、中国男子の心の中に、小足は美人を計る、一つの条件である。（二千年以来、いまだにも小足は美であると言う観念もある	
第二段階； 起源期	五代南唐 （937～975年）	起源環境：宮廷 対 象：宮女の舞姫 背 景：娯楽	規模：ごく一部
第三段階： 興盛期	宋朝（960～1279年）	対象：宮女、仕女から上層階級の女子に、そして、普通の民女に普及した。 背景：この時代の女性は弱々しく、病気がちで西施のような、いつでも倒れそうな歪んだ美感覚を持っていた。	規模：纏足はまだ流行になっていないが、心理状態がすでに歪んでおり、纏足を流行するの兆しと言える。
	熙寧年（キネイ） （1068～1078年） 元豊年（ゲンボウ） （1078～1086年）	対象：宮女、楽士…… 背景：娯楽……	規模：纏足者はごく一部。
	宣和年（センワ） （1119～1126年）	対象：普通の民女まで（普通の民女といってもお嬢様と娼婦の間であった。それは纏足に終止符を打つまで続いた。 背景：お嫁に行く一つの条件や娯楽の道具であった。	規模：全国的に影響を受け、纏足は北から南へ、ひっそりと伝わってきた。
	元朝（1279～1368年） 明朝（1368～1644年）	元朝の中期から纏足は盛んになった、明朝に入ると「三寸金蓮」への崇拜は、元朝を超えた	
	清朝（1644～1911年）	纏足は最も流行され、最盛期に至った。足の寸法はたったの3寸で、中に2.6寸、2.4寸のものもあった。 流行範囲は中国文化の発祥地である黄河流域では最も、浙西のような偏遠地方はちょっと落ちる、広東、広西、湖南、湖北、江西の南等も少ない、福建省はただ廈門（アモイ）においてのみ纏足が流行した。 明朝の末、漢民族以外の人々はまだ纏足をしないが、乾隆帝（ケンリユウ）(1736～1796年)の時、旗人（清朝は満州人の天下である、旗人は満州、蒙古の旗籍にある人）の中に漢民族の女性を真似て纏足者もいた。満人の「花盆底」履物はその纏足の影響の産物と言われる。	

(1)唐説（西暦712～756年）

李淵（リエン）が隋を滅ぼして、帝位につき、梁（リョウ）に滅ぼされるまで約三百年続いた。この間、国の政治は安定し、経済の発展は速く、文化も最盛期に至った。[李白、杜甫（トホ）、白居易（ハクラクテン）、韓愈（カンユ）等詩人もこの時代生れ] 人々の思想は朗らかで、常に、新しいものを追求し、服飾も外域のものを融和して、特色のある唐服を生れた。唐の服は実用的で、禁律も少なく、服飾の解放期であると、歴史上、高く評価された。

但し、開元（カイゲン）（西暦713～742年）から天宝（テンポウ）（西暦742～756年）までの間、唐玄宗（トウゲンシュウ）は段々政事と離れ、宮廷の歌舞に陶醉した。天宝3年、唐玄宗は楊玉環（ヨウギョクカン）を貴妃にした。楊貴妃を非常に愛し、「……、芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起、从此君王不早朝、承歡侍宴無閑暇、春从春游夜專夜、后宮佳麗三千人、三千寵愛在一身、……」、白樂天の『長恨歌』の中に書かれるように、荒淫の生活を送った。西暦752年楊貴妃の兄である楊国忠（ヨウコクチュウ）を宰相（サイショウ）（天子を補佐して政治をとる最高官）に起用した、それ以後、「任人唯賢」の政策が徹底的に変わった。毎日、帝王、宮廷内外、役人らは酒と女の腐敗の生活を送ったため、社会矛盾を激化し、国家の風俗も奇形なまでに走った。世の中の女子の履物、着る物は秦漢（シンカン）の広い袖に戻り、楊貴妃は刺繍の尖る靴を履く先導者になった。これは、女性にとって大きいな打撃で、歴史上では大きいな後退である。後人の話によると、楊貴妃の生前と死後は皆弓形の纏足靴を履いた。清朝の伊世珍は『琅環記』の中に「楊貴妃在馬嵬坡被唐明皇賜死時、有個女子拾得她一双雀頭靴、薄檀木底、鞋長僅3.5寸。」と書かれている。『羣談采録』にも「仙子凌波去不還、独留塵襪馬嵬山、可憐一掬無三寸、踏尽中原万里翻」と記載されている。唐代詩人杜牧（西暦803～852年）の詩の中に、「細尺裁量減四分、織織玉丈筍裏輕雲」（唐尺の1尺は蕪尺の8寸で、蕪尺は今の尺より1寸も大きい、1尺に4寸を減ずると6寸になる、蕪尺で割ると4.8寸になる、今の尺で直すと4.3寸になる）とある。白樂天の詩の中でも「小頭鞋履窄衣裳」と書かれている。また、『唐書』の中に、「今鞞鞋為不纏足者所穿、纏足者以絲為鞋。」と記載され、この記載では唐代の纏足靴は絹で作られるのを表明した。そのほか、西安郊外の中堡村と言う所、唐代の1号、2号の墓を発掘された時、女俑は皆尖る靴を履いたと言う。でも、もっと多い資料では唐代の女性は纏足していないと言う。

唐代には纏足をすでにしているかどうか、謎である。否定する人は多いようである。否定説を主張する人は、むしろ、個別場所で発掘した唐代の女性の身に付けた品を強調して、否定したと思う。もし、唐代には纏足をしていないとすれば、何故、多く唐代詩人の詩の中に存在しない纏足を書かれたりするのかが疑問を抱く。でも、纏足をしたと言う実証がない上、肯定することもできない。

中国は周知の通り、土地が広くて、当時の交通は今のようには発達してないから、纏足が唐代から始まっても、ある所の一部の女性に限られていたと思う、発掘した物も限りある場所で、

一部の女性の物と考えられる。その偶然と偶然の間に必然になる理由が見出せない。

(2) 五代南唐（ナントウ）説（西暦937～975年）

中国では、「三寸金蓮」は五代南唐に始まる、と言うのが圧倒的な意見である。

唐代前の各代の仕女は、「雲頭」、「如意」など足先が上に反っているデザインの履物を履くが、五代の李後主（リコウシュ）は宮娘に纏足させて踊らせたから、仕女の間から纏足を始め、刺繍の尖る靴も履き始めたと考えられる。

南唐の最後の皇帝—李煜（リイク）は詩人でありながら、音楽と美色が好きであった。李後主の宮女に、宮娘（ヨウニャン）と言う、華奢で、踊りの上手な女がいた。そこで、李後主は、6尺ぐらい高さの金製の蓮花台を作らせて、宮娘の足を布で縛って細く小さくし、指先を曲げて新月状にさせ、蓮花の中を舞いながら歩かせた所、その彷徨うさまは「凌波仙子」のようであったと言う。纏足も「金蓮」と呼ばれるようになった。後、宮内外の女子はそれを模倣し始めた。纏足が美であり、貴であり、嬌であり、雅でありと言う認識があった。詩人—唐鐫（トウコウ）は宮娘のために「蓮中花更好、曇里月長新」と言う詩を作った。（図1参照）



図1 宮娘が纏足の包帯を巻いている所
（中国歴代服飾史より）

纏足について、この二つの起源説は信じる部分が多く、時間差は二百年近くもあったが、歴史上、五代十国は唐朝後期の「藩鎮（ハンチン）割据」の継続である、2説は何か繋がりががあると思われる。だから、纏足の起源時期は遅くとも五代南唐と推測される。

以上述べたように、纏足に関する起源説の最大分岐点は起源時間であるが、最大類似点は起源環境—宮廷であることを教えてくれた。「三寸金蓮」起源当時、民間では纏足のことが珍しく見えた、時間の流れにつれて、一つの民俗として、人々に受け取るようになった。この中に、男性は重要な役割を果たしたと思う、男性がいなければ、纏足は花火のようにすぐ闇の中に消えてしまったかもしれない、又、民間まで広い範囲に伝わらなかったと断言できる。

2. 纏足の興盛（図2、図3参照）

五代から宋朝の熙寧、元豊の間は、纏足の興衰の別れ道である。纏足が始められたのは宮廷中、偶然の一つ出来事であって、未だ風習になっていなかった。当時の女性は「三従四徳」を奉仕し、病的な美感覚を持ち始め、漢、唐朝の女性のように生き生きとした風姿を失った、纏足をするのが結果であり、原因でもある。

実は、北宋の熙寧、元豊年以前は纏足はまだ流行になっていないが、記載によると「教坊楽籍」に限られる。北宋の文人—蘇東坡（ソトウバ）は嶺南、江浙流域の民風を描写する時、「吳姬霜雪白、赤脚浣白紗」、「青裙縞袂於潛女、兩足如霜不穿履」と書かれている、民女は素

足で仕事をしているのが分る。同じ時代の徐積（ジョセキ）は嘲笑の口調で民女の仕事振りを「但知勤四肢、不知裏両足」と歌った。但し、宣和年以後、纏足の風習は北から南へと全国的に影響を受けた。纏足を賛美する詩も多く出た、その中に蘇東坡の『菩薩蛮・詠足』は有名だった、「塗香莫惜蓮承歩、長愁羅襪凌波去、只見舞回風、都無行處踪、偷穿宮樣穩、并立双趺困、纖妙說應難、須从掌上看。」最後の二句は纏足した足の繊細さを可愛らしく描写した。晩唐詩人——杜牧（トボク）の「細尺裁量減四分、纖纖玉笋裏輕云」、韓屋（カンオク）の「…六寸膚圓……」、秦少游（シンショウユウ）の「脚上鞋兒四寸羅」と比べると、もっと味がある。それ故、文人たちは纏足の流行に、相当重要な役割を果たしたと言っても過言ではない。文人たちは天下の女子がみんな「纖妙說應難」の足を持つように、望んでいるかもしれない。だから、水田で農家の女性を見掛けた時、浪漫で「輕移蓮歩水云郷」を口ずさむ。

元、明朝の際、纏足は盛んになり、胡応麟（コオウリン）の『明史与服志』の中に述べたように、「至勝國而詩詞曲劇、亡不以此為言、於今而極。……至足之弓小、今五尺童子、咸知艷羨。……」意味は詩、詞、劇などの中にも纏足の描写は頻繁に出てきて、盛んな時は、女性を描く時、先ず、「三寸金蓮」から始まると言うのが定番だった。遊び場に行っても、妓女の纏足靴で杯のかわりに酒をすすむ遊び方も見掛けられたと言う。

同じ時代の王朝で、みんなどういう様子だったか。清朝の紀曉嵐（キギョウラン）は『明懿（メイイ）与皇后』の中に、天啓（テンケイ）元年（西暦1621年）、熹宗帝（キシウ）は婚礼前に行った「選妃」活動が記載された文章をここで訳して述べる。

先ず、天下の十三から十六才の淑女を選出し、「内監」と言う職業の方が、少々高い、少々低い、少々肥えてる、少々痩せてる女性を千人ぐらい除いて、明日、再び彼女たちの耳、目、口、鼻、髪、皮膚、首、肩、背筋を検査する、残った合格者に自分の名前、出生地、年齢などを自己紹介させ、彼女たちの声を聞き、声の良くない人を帰らせた。それで、二千人余りがその場で去った。翌日、「内監」たちは物差しを持って、女性の足を計り、そして、数十歩歩かせ、更に、腕の短い、足の大きい、歩く姿勢の悪い人、約千人を淘汰した。残った千人ぐらいは密室に呼ばれ、宮内の「宮娥」（女官）に、乳の大きさ、脇の匂い、肌の潤いをチェックさせ、入選した人数は三百人ぐらいとなった。その三百人は宮廷内に1ヶ月ぐらい居て、性情、言論、知恵等多方面を観察され、最後の五十人は皆「妃嬪」になる。『野獲編』によると、妃嬪になった宮人は纏足を要求されてないため、入宮後、直ぐ「足紉」（足ぎぬ）を解いた、民間と全く違う、但し、靴の形は先方が丸く巻上げ、「宮様靴」と名付けた靴を履いたと言う。

明朝の末（西暦1644年頃）、襄陽（今、湖北省の同名の県）が陥落した時、敵の男性を捕えたら、手を切る、女性を捕えたら、足を切る、男性の手と女性の足を別々に置く、手の置場は「玉臂峰」、足の置場は「金蓮峰」と名付けたことから、当時、纏足が盛況であったことが分る。

後世になってからも引き続き、次に延べるようなことが起きていた。

西太后に大変可愛いられていた女官——徳齡（トクレイ）女史の回想によるもので、1900年「庚子（コウシ）之変」、八国聯軍は北京へ進入した時、逃げ遅れた女性の内、相当な人数の女性が強姦された、西洋人は昔から中国の「猪尾巴」（男性の辮髪）と「金蓮」を知り尽くしているから、纏足した女性を見付けたら、ある人は強引に靴を脱がせたり、又ある人は足を切ったりと悲惨なことをやった。ある英国軍官は面白がって、南京袋に纏足靴を収集したという。その時、西安へ避暑に行くと言い訳けて、西太后は皇帝、大臣らを連れて逃げた。北京に戻った時、傷だらけの「九門帝都」と蹂躪されて、両足を失った女性たちの惨めな姿を目の前にした。

今日、英国の博物館の中に、中国女性たちの血まみれな「金蓮靴」が陳列されている。

纏足の風習は北から南へと伝播したと言われるが。崇徳（スウトク）3年（西暦1638年）、太宗帝（タイソウ）は「有効他国裏足者重治其罪」を下した、少数民族の人は漢民族を真似て、纏足をする人が出て来たのが想像できる。乾隆帝（ケンリユウ）（西暦1736～1796年）の時、旗人の女性の中にも纏足をする人がいた、満州人の「花盆底」の履物は纏足の影響の産物と言われる。それから100年ぐらいの間、禁止令が何回も降りたが、纏足は絶えずに続いた。実は、清朝に入ってから（西暦1644年）ずっと辛亥（シンガイ）革命（西暦1911年）まで、この250年ぐらいの間、纏足はもっとも流行され、最盛期に至った。最盛期では女性の足の寸法はたったの3寸で、中には2.6寸、2.4寸のものもあった事が次の文献で分る。李漁（リギョ）の『笠翁偶集』に「予遍游四方、見足之最小無累与最小而得用者、莫過於秦之藍州、晋之大同。藍州女子之足、大者3寸、小者犹不及焉。」があった。清朝の詩人——袁枚（エンマイ）は友達への手紙の中に「今人每従花叢、不仰観云鬢先俯察裙下。……仆常過河南入函陝、見乞丐之妻、担水之婦、其脚無不纖小平正、峭如菱角者。」書かれている。李、袁両氏の話はオーバではなく、中原諸地、所謂、中華文化の発祥地である黄河流域で最も普及され、浙西のような偏遠地方は少し低調である。広東、広西、湖南、湖北、江西等南地方も少ない、福建省はただ厦門（アモイ）においてのみ纏足が流行した。ここで、清朝の纏足の状況は前より普遍になった、しかも、足の弓形の程度は以前より大きくなったのが分る。清朝末、山西省の大同（ダイトウ）は、毎年農曆の六月六日に、大規模な



図2 光緒17年（1891年）上海婦女の服飾『上海青樓図記』（衣冠滄桑により）



図3 1907年頃の中国南方婦女の服飾『The Chinese』（衣冠滄桑により）

「晾脚会」というお祭りをを行う、この日、女性たちは盛装をして、両足を前に伸ばして、家の入口に座り、人に評価され、足の小さい人は誉められた。観客は前に進んで、ふり返って見るのはいけないと言うルールもあった。当時、纏足の美しさに対して、覚え易いように、人々は「小、瘦、尖、弯、香、軟、正」七字に分類して表現した。この風習は民国元年（西暦1911年）まで続いた。

以上、纏足の興盛を述べたが、纏足の歴史を以下の通りにまとめておきたい。

- a. 一部から普遍へ（宮廷内の偶然の一つ出来事から、民間の一般の人々まで）
- b. 北から南へ
- c. 足の寸法はだんだん小さく、足の指先は尖るになる。
- d. 足の形は板状から弓形になる、しかも、足の湾曲の程度は代々増加した。

又、纏足の色々な起源説と興盛は、纏足を始める頃からいきなり「三寸金蓮」になったではなく、纏足の発展は約四段階を経て、漸く「三寸金蓮」まで辿り着いたと教えてくれた。その四段階は：

第一段階は既に定形した女性の足を布できつく包むだけである。

第二段階は起源期の纏足である。

第三段階は纏足の興盛期の宋朝（西暦960年～1279年）から清朝（西暦1644年～1911年）までの間である、当時、纏足した足の寸法は僅か3寸で、中に2.6寸、2.4寸の者もあった。

第四段階は清朝が滅びた後、天足運動の影響で、新たに纏足する人が少なくなった上、纏足した人も布を解いて、足を自由にさせた、そのお陰で足の寸法も4寸、5寸と少しずつ自然に戻して、安定した歩き姿で人の前に現れるようになった。（写真2参照）

3. 纏足の効用

(1) 纏足の分類

「金蓮」は初めてから「王公貴族」の遊び道具として、知らされていったので、悠久なる歴史の中、「金蓮」の発展とともに、男たちは色々な遊び方を試みた。例えば、「金蓮」競争をさせたり、酒場では杯の代わりになったりした。そして、纏足を深く研究する人も出てきた、著名な人に李笠翁（リリオウ）と方絢（ハウケン）がいた。特に方絢



写真2 纏足の老婆
『済南市郊外の自由市場にて』より

の著書『香蓮品藻』の中で、先ず、香蓮（纏足の別名）の「宜称」、「栄寵」、「憎疾」、「屈辱」というように五十八点に分類して、纏足の是と非を現している。次いで、香蓮は「肥」、「軟」、「秀」など三つの大事な意味があると解釈した、「瘦則寒、強哉矯、俗遂無藥可医矣！故肥乃腴潤、軟斯柔媚、秀方郁雅。然肥不在肉、軟不在纏、秀不在履。且肥軟或可以形求、秀但当以神遇。」（瘦せてると寒さを感じる、強いと曲がる、それらの欠点は直せない。適当な豊満さと軟らかさは潤いと柔媚を感じられ、秀でこそ優雅であると言える。しかし、「肥」は肉つきだけではなく、「軟」はまつわるによるものではなく、「秀」は履物の美しさによるものではなく。「肥」「軟」は外見で求めるが、「秀」は神から与えられたものである。）又、香蓮は「蓮瓣」、「新月」、「和弓」、「竹萌」、「菱角」など基本的な五つの方式に基づいて、色々な変化によって、更に、細かく十八種類の香蓮を分けている。

- a) 四照蓮 — 端端正正、窄窄弓弓、在四寸三寸之間者。（きちんとして、足幅は狭く、弓形で、三寸と四寸の間の者）
- b) 錦辺蓮 — 四寸以上至五寸、雖纏束端正、而非勁履、不見菱角者。（四寸から五寸まで、角がなく、きちんとしてるが、無力感を漂う者）
- c) 釵頭蓮 — 瘦而過長、所謂竹萌式也。（細長い者）
- d) 単葉蓮 — 窄底平趺（足の甲）、所謂和弓底也。（足の底が狭くて、足の甲は平らになった者）
- e) 仏頭蓮 — 豐趺隆然、如仏頭挽髻、所謂菱角色、江南之鵝頭脚也。（足の甲は隆起している者）
- f) 穿心蓮 — 着里高低者。（？）
- g) 碧蓮台 — 着外高低者。（？）
- h) 并頭蓮 — 將指鉤援、俗謂之里八字。（親指を押えて、八の字の姿勢をとる者）
- i) 并蒂蓮 — 銳脚各揚、俗謂之外八字。（親指が立っていて、外股の姿勢をとる者）
- j) 同心蓮 — 側胼讓指、俗謂之里拐。（足の重心が外側の者）
- k) 分香蓮 — 敬指讓胼、俗謂之外拐。（足の重心が内側の者）
- l) 合影蓮 — 如侑坐欹器、俗称一順拐。（足の重心が足の真中の者）
- m) 纏枝蓮 — 全体迂回者。（四本の指が回転するように重なっている者）
- n) 倒垂蓮 — 決踵躡底、俗謂坐跟。（足の重心が踵にくるの者）
- o) 朝日蓮 — 翹指上向、全以踵行。（親指が立っていて、踵で歩く者）
- p) 千葉蓮 — 五寸以上、雖略纏粗縛、以翹之可堪供把者。（五寸以上、親指が立っている者）
- q) 玉井蓮 — 銳是靴尖、非関纏束、昌黎詩所謂「花開十丈藕如船」是也。（靴の先は尖っているが、足の形は蓮根のような者）
- r) 西番蓮 — 半路出家、解纏謝縛、軟之玉井蓮、反似有娉婷之致焉。（途中から纏足をやめたが、「玉井蓮」より美しい者）

(2) 纏足の良さ

纏足の本来の善し悪しを述べたが、纏足の良い所はどこでしょう？方絢の話によると、香蓮は九ヶ所にいる時、この上ない良さが出てくる、略称「香蓮三上三中三下」。

三上：掌上、肩上、千秋板上（掌の中に入る時と、お籠やブランコで微かに見える時）

三中：被中、灯中、雪中（布団の中、灯の明りの中、雪の中）

三下：簾下、屏下、籬下（カーテンの下、屏風の下、すだれの下）

(3) 「金蓮」競争

馮驥才（ヒョウキザイ）は『三寸金蓮』と言う小説の中で、具体的に「金蓮」競争の評価基準を述べた。

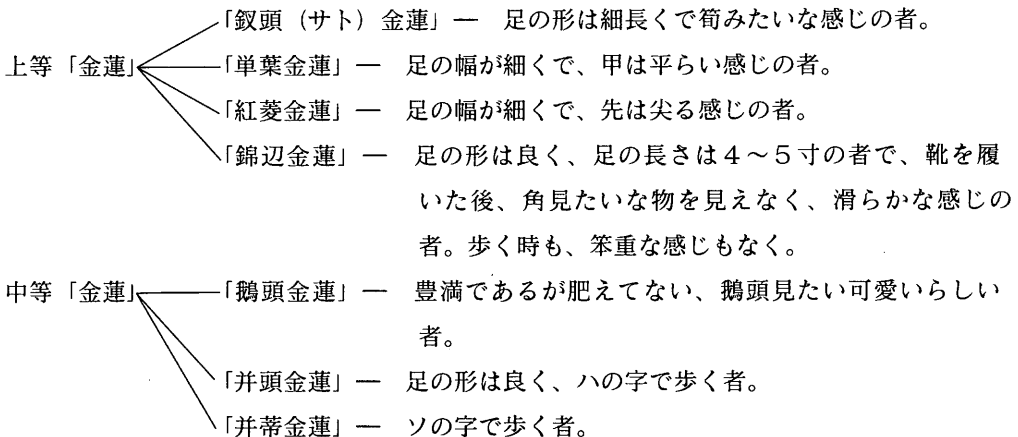
「金蓮」競争は主に足の「形」と「態」を競う。

a) 形

「形」は——短、窄、薄、平、直、尖など六条件を備えるべき、「短」は足の寸法に対する要求で、「窄」は足の幅に対する要求で、「薄」は足の厚さに対する要求で、「平」は足の甲に対する要求で、「直」は踵の部分に対する要求で、「尖」は足の先方に対する要求である。

b) 態

「態」は上等、中等、下等「金蓮」三等級を分けられる。



下等「金蓮」——上等、中等「金蓮」の条件を満たさない者は下等「金蓮」である。

(4) 「妓靴行酒」の遊び

a) 方絢は『貫月査』の中に「妓靴行酒」の遊び方を記録している。

「金蓮」の一つを的にして、一定の距離を置いて、蓮の実や豆などを五つ投げ、命中数の少ない人が酒を罰せられる、もう一つの「金蓮」は杯の代わりにて、お酒を注いで、負けた人は「金蓮」を持って飲む。

「金蓮」は月の如く湾曲し、実を投げる時、星のように貫いて、酒臭いいっぱいのお客は浮きカス（査は渣でカスの事）のようで、故に、この遊び方は『貫月査』と名付けた。

b)「妓靴」を座席で回していく内、「妓靴」の持ち方も変えて、例えば、靴の口を上下にしたり、靴の先或底を持ったり、水平に出したり、高く挙げたり、下に下げたりして遊んだ。この遊び方はちょっと複雑であるが、歌があるので、まだ覚えやすい。この歌は「双日高声只日黙、初三警尖如新月。底翻初八報上弦、望日拳杯向外側、平拳靴杯二十三、三十覆杯照初一。報差時日又重行、罰乃参差与横執。」である。

纏足の全類、競争、効用などは、以上述べたように、男性の遊び道具であったが、女性にとってはむしろ鎖である。女性は纏足によって、主人への依拠性を増し、世間離れの生活を送ってきた。政治上、経済上の地位を失った、同時に人格上の尊厳も得られなくなった。

4. 纏足の発生と発展の根本的な要因

纏足の発生と発展は約一千年の間持続した、根本的な要因は以下の四つである。

(1)性的欲求

女性は経済的な地位を失ったと同時に、男性は征服者としての自覚をしてきて、女性の地位も男性の付属品から玩具に変わってきた。「楚宮之腰」、「漢宮之髻」なども、男性の意志によって起きたが、纏足もその中の一つである。

(2)女性への約束

男性の社会的地位を優位とし、男性特権と言う亭主関白の意識が強くなった、「女子無才便是德」の思想の下で、女性は社会に進出しないように、纏足を要求した。『女児経』の中で、纏足について次のように指摘した。「為甚事、裏了足？不是好看如弓曲、恐他輕走出房門、千纏万裏来拘束。」（どうして纏足する？綺麗になって欲しいためではなく、家から出られないように拘束するためである。）清朝の歌謡にも同じ事を記している：「裏上脚、裏上脚、大門以外不許尔走一匝」と。

(3)男女の区別

昔、中国の礼儀作法は「男女有別」を主張した、男性は権力があり、才能があり、女性は「三従（在家従父母、出嫁従丈夫、寡後従兒子）四徳」を要求され、「女紅」（裁縫）さえできればいいと言われてきた。服飾も仕草も、女らしさを要求された、おそらく女性の纏足も、この心理状態下の産物であろう。

(4)貞操観念

中国では貞操観念を重く考える傾向が今でもある。宋朝の偉大な儒学者——程子さえ「餓死事小、失節事大」と主張した。女性は纏足によって、行動力が落ち、外界との接触はゼロに近い状態になり、ある意味では貞操も守れた。

以上、纏足の発生と発展の四つの原因が述べたが、根本的な原因は、やはり、男性たちは女性を指揮しやすいように、自分たちに自由自在な放浪生活ができるように、女性が纏足することによって「男尊女卑」の社会を作り出した。

5. 纏足靴の材料、デザイン

五代南唐（西暦937～975年）からの纏足は、前に述べたように、宋朝に入ると、人々にだんだん受け入れられるようになり、文献、史料にも度々現れるようになった。山西省太原の晋祠（シンシ）は宋朝の時立てられたもので、中に女性の像は典型的な宋朝女性の服装で、女像の足は纏足靴を履いていた。

宋朝の纏足靴の表の材料は「錦緞」で、さらにその上に色々図案を刺繍している、しかも、使用する材料、製法と装飾によって、「繡靴」、「錦靴」、「緞靴」、「鳳靴」、「金縷靴」と名付けた。宋朝纏足靴のもう一つの特徴は靴の色である、この時代は秦漢、隋、唐時代に使った赤、紫、藍、緑等濃く且艶やかな色と違って、柔和な中間色が多く用いられるようになった。例えば淡い黄色、緑、薄いピンク、白等である。このような靴の色はずっと元朝、明朝、清朝に入っても影響していた。但し、宋朝初期の靴の色はまだ唐朝の影響があり、赤を主とした。宋朝の時、纏足していない人もいた。そういう人達は普段、円頭、平頭及び翹頭（キョウトウ）の靴を履く。

元朝（西暦1271～1368年）の女性の服装は宋朝の時と同じく、スカートに細かく襞を取り、長さは足の甲まで覆い、刺繍した纏足靴を履いていた。元朝の実際の統治者は蒙古（モウコ）族であり、蒙古族の女性の服飾は元朝女性に影響を与えたと言う。もちろん、「三寸金蓮」の発展にも多少影響があった。

明朝（西暦1368～1644年）後、「三寸金蓮」が盛んになり、賞美品になった。このことは『孟蜀宮妓図』の絵の中にも書かれている。史料によると、明朝の後妃、仕女たちは、礼服と普段着の時、皆先の尖る刺繍した纏足靴を履いていた。ただ『西遊記』の中にも、「鳳嘴弓靴三寸」、「細裙斜抹露金蓮」等何か所にも「三寸金蓮」が描写されている。小説の源は民間であり、本の中に「三寸金蓮」が頻繁に書かれているのは、社会の風貌その物が作者の脳裏に絶え間なく反映していたからであろう。明朝の風流才子——唐寅（トウイン）は五代の物語から『四美人図』を仕上げた。その絵から、五代女性𧰨服飾を少し見ることができる。四美人は皆、底の弓形靴を履いている。

清朝（西暦1644～1911年）に入ると、纏足はついに高潮に達した。この時代の仕女服の特色は：上に「大襟長褂（ダイキンチョウカイ）」、下に刺繍いりの大口ズボン、ズボンの裾にはレース、或は刺繍を飾る、纏足靴にも刺繍を入れた。清朝の末、民国の初め、女性の中に、一部の人々はズボンの裾を紐で足首のところに縛り付けた。「大襟長褂」の下に飾り裾が見えるように、その裾の部分を「金蓮」靴の口に縫いつけることもあった。（図4参照）



清朝の靴の花紋にも定まりがある。牡丹は「富貴栄華」を象徴し、若
図4 清朝 纏足ブーツ
(中国鞋文化史により)

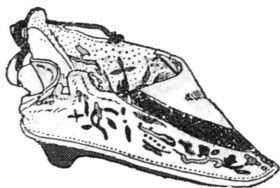


図5 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存



図6 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存



図7 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存



図8 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

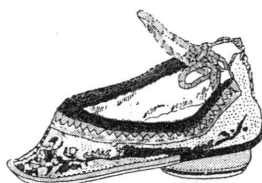


図9 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

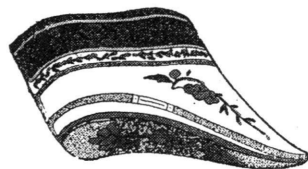


図10 山東地方の纏足靴
青島博物館に保存



図11 清朝 夏用纏足靴
中国古鞋博物館に保存



図12 清朝 夏用纏足靴
安徽省博物館に保存



図13 清朝 「金蓮」カバー 冬用
安徽省博物館に保存

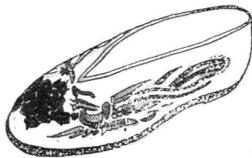


図14 1930年代老舗
上海小花園鞋店の特色靴



図15 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

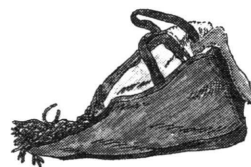


図16 清朝 老婦人用纏足靴
安徽省古鞋博物館に保存

(中国鞋文化史により)

い女性を中心に使った。又、蝙蝠（コウモリ）の手に「寿」字を入れて図案化し、「多福多寿」の意味として、老年女性が多く使った。その他、刺繍靴を含めて、服飾の中に季節の花も取り入れた。西太后の女官——徳齡（トクレイ）女史の『御香縹緞録』の「御衣庫」の章に春、夏、秋、冬、四季それぞれによって、違うデザインの服を着る、各季節は一つの花で表す、春は牡丹で、夏は蓮花で、秋は菊で、冬は梅の花である。四季を代表する花は「季花」と言う。（図5～13参照）後、「季花」入りの纏足靴は有名な「上海小花園鞋店」の特色品となった。（図14参照）

服飾制度と同じく、清朝の靴飾制度も非常に厳しい。普通の女性は金色の刺繍と真珠を使っ
てはいけない、龍、鳳を飾ってはいけない、また、純粋な黄色及び緑色を身につけてはいけ
ない、ただ赤味の入った黄色は許すと言う厳しい規則があった。普通の女性はきれいに飾りたい
ため、「三寸金蓮」の上に絨球（毛糸のぼんぼり）、銅鈴を付けたり、花鳥図案を刺繍したりし
た。（図15、16参照）

1911年の辛亥革命は清朝を翻した、纏足もだんだん廃止となった。甘肅（カンシュク）
省の東郷（トウキョウ）族は「放足」、「解放足」で有名であったが、「放足」、「解放足」と言
う足は「三寸金蓮」よりちょっと大きく、皆、やはり自分の足に合う纏足靴を履いた。当時、
纏足靴のデザインは、靴の後ろのバックステイ部に紐通し穴があって、靴の底も非常に厚く、
又、長持ちするため、更に牛の皮を靴の底に付けた。靴の上の部分は、夏は、布だけで、冬に
なると布と布の間に綿を入れる。お祭り、記念日の時には、東郷族の女性はかならず踵の高い、
刺繍入りの纏足靴を履く。刺繍の図案は古い時代から伝った「達子花」である。以後、漢民族
との交流が多くなってから、漢民族の刺繍方法もとりいれた。

中国の西南地方の布依（ファイ）族の女性は皆、織物と刺繍に才能がある。老年の女性は未だ
に、精美な翹頭満邦（アンクルブーツ）刺繍入りの纏足靴を自分で作って、履いている、皆、
足の大きさは約四寸である。昔、布依族の女性は、自分で作る刺繍入りの纏足靴を貴重なお土
産と縁起物として、大事な人に贈ると言う礼があったが、纏足をしなくなった今日、こう言う
風習もなくなった。

Ⅲ、まとめ

中国の女性たちは約一千年前から、纏足を始めた。言うまでもなく、纏足は幼女を苦しめ、
女性を家庭に閉じ込めた、それによって、色々な仕事ができない、健康な子どもも生めない、
その苦痛は女性たちの弱い立場によって耐えて来た。近代に入ってから、一般の人々は漸く覚
悟ができて、纏足もだんだん廃止の方向となった、しかし、男尊女卑の社会が続く限り、女性
も男性の付属品、遊び道具（違うかたちで、色々な面で）にならなければならないと思う。

実際、纏足のデータを収集する中で、中国の歴史を再勉強することもできて、その結果、こ
れまで想像できなかった程の、秘められた史実を知って、驚くばかりである。

IV、参考文献

- 1) 駱 榮驥：中国鞋文化史，上海科技出版社，上海（1990）
- 2) 駱 新，姚 莽：衣冠滄桑，農村讀物出版社，上海（1991）
- 3) 高 洪興，徐 錦鈞，張 強：婦女風俗考，上海文芸出版社 上海
- 4) 袁 杰英：中国歷代服飾史，高等教育出版社，上海
- 5) 張 国荣：唐詩三百首詠解，中国文聯出版公司，北京，（1987 年）